



アグニの神

芥川龍之介

支那の上海の或町です。書でも薄暗い或家の二階に、人相の悪い印度人の婆さんが一人、商人らしい一人の亞米利加人と何か頻に話し合つてゐました。「實は今度もお婆さんに、占ひを頼みに來たのだがね、——」

亞米利加人はさう言ひながら、新しい巻煙草へ火をつけました。

「占ひですか？ 占ひは當分見ないことにしましたよ。」
婆さんは嘲るやうに、じろりと相手の顔を見ました。

「この頃は折角見て上げてても、御禮さへ碌にしない

人が、多くなつて來ましたからね。」

「そりや勿論御禮をするよ。」

亞米利加人は惜しげもなく、三百弗の小切手を一枚、婆さんの前へ投げてやりました。

「差當りこれだけ取つて置くさ。もしお婆さんの占ひが當れば、その時は別に御禮をするから、——」
婆さんは三百弗の小切手を見ると、急に愛想がよくなりました。

「こんなに澤山頂いては、反つて御氣の毒ですわね。」

「さうして一體又あなたは、何を占つてくれるとおつしやるんです？」

「私が見て貰ひたいのは、——」

亞米利加人は煙草を啣へたなり、狡猾さうな微笑を浮かべました。

「一體日米戦争はいつあるかといふことなんだ。それさへちやんとわかつてゐれば、我々商人は忽ちの内に、大金儲けが出来るからね。」

「ちや明日いらつしやい。それまでに占つて置いて上げますから。」

「さうか。ちや間違ひのないやうに、——」

印度人の婆さんは、得意さうに胸を反らせました。

「私の占ひは五十年來、一度も外れたことはないのですよ。何しろ私のはアグニの神が、御自身御告げをなさるのですからね。」

亞米利加人が歸つてしまふと、婆さんは次の間の戸口へ行つて、

「惠運。惠運。」と呼び立てました。

その聲に應じて出て來たのは、美しい支那人の女の子です。が、何か苦勞でもあるのか、この女の子の下ぶくれの頬は、まるで蠟のやうな色をしてゐました。

「何を愚圖々々してゐるんだえ？ ほんたうにお前位、づらづらしい女はありやしないよ。きつと又臺所で居睡りか何かしてゐたんだらう？」

惠運はいくら叱られても、ちつと俯向いた儘黙つてゐました。

「よく御聞きよ。今夜は久しぶりにアゲニの神へ、御伺ひを立てるんだからね、そのつもりでゐるんだよ。」

女の子はまつ黒な婆さんの顔へ、悲しさうな眼を擧げました。

「今夜ですか？」

「今夜の十二時。好いかね？ 忘れちやいけないよ。」

印度人の婆さんは、脅すやうに指を擧げました。

「又お前がこの間のやうに、私に世話ばかり焼かせると、今度こそお前の命はないよ。お前などは殺さうと思へば、鶴つ仔の頸を絞めるより——」

かう言ひかけた婆さんは、急に顔をしかめました。ふと相手に気がついて見ると、惠運はいつか窓側に行つて、丁度明いてゐた硝子窓から、寂しい往來を

眺めてゐるのです。

「何をみてゐるんだえ？」

惠運は愈色を失つて、もう一度婆さんの顔を見上げました。

「よし、よし、さう私を莫迦にするんなら、まだお前は痛い目に會ひ足りないだらう。」

婆さんは眼を怒らせながら、そこにあつた箒をふり上げました。

丁度その途端です。誰か外へ来たと思えて、入口の戸を叩く音が、突然荒々しく聞え始めました。

二

その日のかれこれ同じ時刻に、この家の外を通りかかつた、年の若い一人の日本人があります。それがどう思つたのか、二階の窓から顔を出した支那人の女の子を一目見ると、しばらくは呆氣にとられたやうに、ぼんやり立ちすくんでしまひました。

そこへ又通りかかつたのは、年をとつた支那人の人力車夫です。

「おい。おい。あの二階に誰が住んでゐるか、お前は知つてゐないかね？」

日本人がその人力車夫へ、いきなりかう問ひかけました。支那人は柵棒を握つた儘、高い二階を見上げましたが、「あすこですか？」



すこには、何とかいふ印度人の婆さんが住んでゐます。」と、氣味悪さうに返事をする、匆々行きさうにするのです。

「まあ、待つてくれ。さうしてその婆さんは、何を商賣にしてゐるんだ？」

「占ひ者です。が、この近所の噂ちや、何でも魔法さへ使ふさうです。まあ、命が大事だつたら、あの婆さんの所などへは行かない方が好いやうですよ。」

支那人の車夫が行つてしまつてから、日本人は腕を組んで、何か考へてゐるやうでしたが、やがて決心でもついたので、さつさとその家中へはひつて行きました。すると突然聞えて来たのは、婆さんの罵る聲に交つた、支那人の女の子の泣き聲です。日本人はその聲を聞かざらうか、一股に二三段づつ、薄暗い梯子を駆け上りました。さうして婆さんの部屋の戸を力一は

「叩き出しました。」

戸は直ぐに開きました。が、日本人が中へはひつて見ると、そこには印度人の婆さんがたつた一人立つてゐるばかり、もう支那人の女の子は、次の間へでも隠れたのか、影も形も見當りません。

「何か御用ですかえ？」

婆さんはさも疑はしさうに、じろじろ相手の顔を見ました。

「お前さんは占ひ者だらう？」

日本人は腕を組んだ儘、婆さんの顔を睨み返しました。

「どうです。」

「ぢや私の用なぞは、聞かなくてもわかつてゐるぢやないか？ 私も一つお前さんの占ひを見て貰ひにやつて来たんだ。」

「何を見て上げるんですえ？」

婆さんは益々疑はしさうに、日本人の容子を窺つ

てゐました。

「私の主人の御嬢さんが、去年の春行方知れずになつた。それを一つ見て貰ひたいんだが、——」

日本人は一句一句、力を入れて言ふのです。

「私の主人は香港の日本領事だ。御嬢さんの名は妙子さんとおつしやる。私は遠藤といふ書生だが——」

どうだね？ その御嬢さんはどこにいらつしやる。」

遠藤はかう言ひながら、上衣の隠しに手を入れると、一棹のピストルを引き出しました。

「この近所にいらつしやりはしないか？ 香港の警察署の調べた所ぢや、御嬢さんを攫つたのは、印度人らしいといふことだつたが、——隠し立てをする」と爲にならんだ。

しかし印度人の婆さんは、少しも怖がる氣色が見えませんが、見えない所か唇には、反つて人を莫迦にしたやうな微笑さへ浮べてゐるのです。

「お前さんは何を言ふんだえ？ 私はそんな御嬢さ

んなんぞは、顔を見たこともありやしないよ。」

「嘘をつけ。今その窓から外を見てゐたのは、確かに御嬢さんの妙子さんだ。」

遠藤は片手にピストルを握つた儘、片手に次の間の戸口を指さしました。

「それでもまだ剛情を張るんなら、あすこにゐる支

那人を

つれて

来い。」

「あれ

は私の

貰ひ子

だよ。」

婆さ

んはや

はり嘲

るやう



に、にやにや獨り笑つてゐるのです。

「貰ひ子が貰ひ子でないか、一目見りやわかることだ。貴様がつれて来なければ、おれがあすこへ行つて見る。」

遠藤が次の間へ踏みこまうとすると、咄嗟に印度人の婆さんは、その戸口に立ち塞がりました。

「ここは私の家だよ。見ず知らずのお前さんなんぞに、奥へはひられてたまるものか。」

「退け。退かないと射殺すぞ。」

遠藤はピストルを挙げました。いや、挙げようとしたのです。が、その拍子に婆さんが、鴉の啼くやうな聲を立てたかと思ふと、まるで電氣に打たれたやうに、ピストルは手から落ちてしまひました。これには勇み立つた遠藤も、さすがに膽をひしがれたのでせう、ちよいとの間は不思議さうに、あたりを見廻してゐましたが、忽ち又勇氣をとり直すと、

「魔法使め」と罵りながら、虎のやうに婆さんへ飛



三

その夜の十二時に近い時分、遠藤は獨り婆さんの家の前にたたずみながら、二階の硝子窓に映る火影を口惜しさうに見つめてゐました。

「折角御嬢さんの在りかをつきとめながらとり戻すことが出来ないのは残念だな。一そ警察へ訴へようか? いや、いや、支那の警察が手ぬるいことは、香港でもう懲り懲りしてゐる、萬一今度も逃げられたら、又探るのが一苦勞だ。といつてあの魔法使には、ピストルさへ役に立たないし、——」

遠藤がそんなことを考へてゐると、突然高い二階の窓から、ひらひら落ちて來た紙切れがあります。

「おや、紙切れが落ちて來たが、——もしや御嬢さんの手紙ぢやないか?」

ひかかりました。

が、婆さんもさるものです。ひらりと身を躲すが早いか、そこにあつた箒をとつて、又掴みかからうとする遠藤の顔へ、床の上の五味を掃きかけました。すると、その五味が皆火花になつて、眼といはず、口といはず、ばらばらと遠藤の顔へ焼きつくのです。

遠藤はたうとうたまり兼ねて、火花の旋風に追はれながら、轉げるやうに外へ逃げ出しました。

から咳いた遠藤は、その紙切れを、拾ひ上げながらそつと隠した懐中電燈を出して、まん圓な光に照らして見ました。すると果して紙切れの上には、妙子が書いたのに違ひない、消えさうな鉛筆の跡があります。

「遠藤サン。コノ家ノオ婆サンハ、恐シイ魔法使デス。時々真夜中ニ私ノ體へ、アグニトイフ印度ノ神ヲ乘リ移ラセマス。私ハソノ神ガ乘リ移ツテキル間中、死ンダヤウニナツテキルノデス。デスカラドンナ事ガ起ルノカ知リマセンガ、何デモオ婆サンノ話デハ、アグニノ神ガ私ノ口ヲ借リテ、イロイロ豫言ヲスルノダサウデス。今夜モ十二時ニハオ婆サンガ又アグニノ神ヲ乘リ移ラセマス。イツモダト私ハ知ラズ知ラズ、氣ガ遠クナツテシマフノデスガ、今夜サウナラナイ内ニ、ワザト魔法ニカカツタ眞似ヲシマス。サウシテ私ヲオ父様ノ所へ返サナイトアグニ

ノ神ガオ婆サンノ命ヲトルト言ツテヤリマス。オ婆サンハ何ヨリモアグニノ神ガ怖イノデスカラ、ソレヲ聞ケバキツト私ヲ返スダラウト思ヒマス。ドウカ明日ノ朝モウ一度、オ婆サンノ所へ來テ下サイ。コノ計略ノ外ニハオ婆サンノ手カラ、逃ゲ出スミチハアリマセン。サウナラ。」

遠藤は手紙を読み終ると、懐中時計を出して見ました。時計は十二時五分前です。

「もうそろそろ時刻になるな、相手はあんな魔法使だし、御嬢さんはまだ子供だから、餘程運が好くないと、——」

遠藤の言葉が終らない内に、もう魔法が始まるのでせう。今まで明るかつた二階の窓は、急にまつ暗になつてしまひました。と同時に不思議な香の匂が町の敷石にも滲みる程、どこからか靜に漂つて來ました。(つづく)



アグニの神 (アグニ)

芥川龍之介

六〇

四

その時あの印度人の婆さんは、ランプを消した二階の部屋の机に、魔法の書物を掲げながら、頻に呪文を唱へてゐました。書物は香爐の火の光に、暗い

中でも文字だけは、ぼんやり浮き上がらせてゐるので

す。婆さんの前には心配さうな惠蓮が、——いや、支那服を着せられた妙子が、ちつと椅子に坐つてゐました。さつき窓から落した手紙は、無事に遠藤さん

の手へはひつたであらうか？ あの時往來にゐた人影は、確に遠藤さんだと思つたが、もしや人違ひではなかつたであらうか？——さう思ふと妙子は、ゐても立つてもゐられないやうな氣がして來ます。しかし今うつかりそんな氣ぶりが、婆さんの眼にでも止まつたが最後、この恐しい魔法使ひの家から、逃げ出さうといふ計略は、すぐに見破られてしまふでせう。ですから妙子は一生懸命に、震へる兩手を組み合せながら、かねてたのんで置いた通り、アグニの神が乗り移つたやうに、見せかける時の近づくのを今か今かと待つてゐました。

婆さんは呪文を唱へてしまふと、今度は妙子をめぐりながら、いろいろな手ぶりを始めました。或時は前へ立つた儘、兩手を左右に舉げて見せたり、又或時は後へ來て、まるで眼かくしてもするやうに、そつと妙子の額の上へ手をかざしたりするのです。もしこの時部屋の外から、誰か婆さんの容子を見て

ゐたとすれば、それはきつと大きな蝙蝠か何かか、蒼白い香爐の火の光の中に、飛びまはつてもゐるやうに見えただでせう。

その内に妙子はいつものやうに、だんだん睡氣がきざして來ました。が、こゝで睡つてしまつては、折角の計略にかけることも、出來なくなつてしまふ道理です。さうしてこれが出來なければ、勿論二度とお父さんの所へも、歸れなくなるのに違ひありません。

「日本の神々様、どうか私が睡らないやうに、御守りなすつて下さいまし。その代り私はもう一度、たとひ一目でもお父さんの御顔を見ることが出來たならすぐに死んでもよろしうございます。日本の神々様、どうかお婆さんを欺せるやうに、御力を御貸し下さいまし。」

妙子は何度も心の中に、熱心を祈りを續けました。しかし睡氣はおひおひに、強くなつて來るばかりで

す。と同時に妙子の耳には、丁度銅羅でも鳴らすやうな、得體の知れない音楽の聲が、かすかに傳はり始めました。これはいつでもアグニの神が、空から降りて来る時に、きつと聞える聲なのです。

もうかうなつてはいくら我慢しても、睡らずにゐることは出来ません。現に目の前の香爐の火や、印度人の婆さんの姿でさへ、氣味の悪い夢が薄れるやうに、見る見る消え失せてしまふのです。

「アグニの神、アグニの神、どうか私の申すことを御聞き入れ下さいまし。」

やがてあの魔法使ひが、床の上にひれ伏した儘、暖れた聲を擧げた時には、妙子は椅子に坐りながら殆ど生死も知らないやうに、いつかもうぐつすり寝入つてゐました。

五

妙子は勿論、婆さんも、この魔法を使ふ所は、縦

の眼にも觸れないと、思つてゐたのに違ひありません。しかし實際は部屋の外に、もう一人戸の鍵穴から、覗いてゐる男があつたのです。それは一體誰でせうか？——言ふまでもない、書生の遠藤です。

遠藤は妙子の手紙を見てから、一時は往來に立つたなり、夜明けを待たうかとも思ひました。が、お嬢さんの身の上を思ふと、どうしてもじつとしてはゐられませんか。そこでとうとう盗人のやうに、その家の中へ忍びこむと、早速この二階の戸口へ來てさつきから透き見をしてゐたのです。

しかし透き見をすると言つても、何しろ鍵穴を覗くのですから、蒼白い香爐の火の光を浴びた、死人のやうな妙子の顔が、やつと正面に見えるだけです。その外は机も、魔法の書物も、床にひれ伏した婆さんの姿も、まるで遠藤の眼にははひりません。しかし暖れた婆さんの聲は、手にとるやうにはつきり聞えました。

「アグニの神、アグニの神、どうか私の申すことを御聞き入れ下さいまし。」
婆さんがかう言つたと思ふと、息もしないやうに坐つてゐた妙子は、やはり眼をつぶつた儘、突然口

を利き始めました。しかもその聲がどうしても、妙子のやうな少女とは思はれない、荒々しい男の聲なのです。

「いや、あれはお前の願ひなどは聞かない。お前はこれの言ひつけに背いて、いつも悪事ばかり働いて來た。おれはもう今夜限り、お前を見捨てようと思つてゐる。いや、その上に悪事の罰を下してやらうと思つてゐる。」

婆さんは呆氣にとられたのでせう。暫くは何とも答へずに、囁ぐやうな聲ばかり立ててゐました。が、妙子は婆さんに頓着せず、おごそかに話し續けるのです。

「お前は憐れな父親の手から



この女の子を盗んで来た。もし命が惜しかつたら、明日とも言はず今夜の内に、早速この女の子を返すが好い。」

遠藤は鍵穴に眼を當てた儘、婆さんの答を待つてゐました。すると婆さんは驚きでもするかと思ひの外、憎々しい笑ひ聲を洩らしながら、急に妙子の前へ突つ立ちました。

「人を莫迦にするのも、好い加減におし。お前は私を何だと思つてゐるのだえ。私はまだお前に欺される程、毫碌はしてゐない心算だよ。早速お前を父親へ返せ——警察の御役人ぢやあるまいし、アグニの神がそんなことを御言ひつけになつてたまるものか。」

婆さんはどこからとり出したか、眼をつぶつた妙子の顔の先へ、一挺のナイフを突きつけました。

「さあ、正直に白状おし。お前は勿體なくもアグニの神の、聲色を使つてゐるのだらう。」

婆さんはナイフを振り上げました。もう一分間遅れても、妙子の命はなくなりませす。遠藤は咄嗟に身を起すと、錠のかかつた入口の戸を無理無體に明けようとした。が、戸は容易に破れません。いくら押ししても、叩いても、手の皮が摺り剥けるばかりです。

六

その内に部屋の中からは、誰かのわつと叫ぶ聲が、突然暗やみに響きました。それから人が床の上へ、倒れる音も聞えたやうです。遠藤は殆ど氣違ひのやうに、妙子の名前を呼びかけながら、全身の力を肩に集めて、何度も入口の戸へぶつかりました。

板の裂ける音、錠のはね飛ぶ音、——戸はとうとう破れました。しかし肝腎の部屋の中は、まだ香爐に蒼白い火がめらめら燃えてゐるばかり、人氣のないやうにし



さつきから容子は窺つてゐても、妙子が實際睡つてゐることは、勿論遠藤にはわかりません。ですから遠藤はこれを見ると、さては計略が露顯したかと思はず胸を躍らせました。が、妙子は相變らず目蓋一つ動かさず、嘲笑ふやうに答へるのです。

「お前も死に時が近づいたな。おれの聲がお前には人間の聲に聞えるのか。おれの聲は低くとも、天上に燃える炎の聲だ。それがお前にはわからないのか。わからなければ、勝手にするが好い。おれは唯お前に尋ねるのだ。すぐにこの女の子を送り返すか、それともおれの言ひつけに背くか——」

婆さんはちよいとためらつたやうです。が、忽ち勇氣をとり直すと、片手にナイフを握りながら、片手に妙子の襟上を掴んで、するする手もとへ引き寄せました。

「この阿魔め。まだ剛情を張る氣だな。よし、よし、それなら約束通り、一思ひに命をとつてやるぞ。」

んとしてゐます。

遠藤はその光を便りに、怯づ怯づあたりを見廻しました。

するとすぐに眼にはひつたのは、やはりちつと椅子にかけた、死人のやうな妙子です。それが何故か遠藤には、頭に毫光でもかかつてゐるやうに、嚴か

な感じを起させました。

「御嬢さん、御嬢さん。」

遠藤は椅子の側へ行くと、妙子の耳もとへ口をつけて、一生懸命に叫び立てました。が、妙子は眼をつぶつたなり、何とも口を開きません。

「御嬢さん。しつかりおしなさい。遠藤です。」

妙子はやつと夢がさめたやうに、かすかな眼を開きました。

「遠藤さん？」

「さうです。遠藤です。もう大丈夫ですから、御安心なさい。さあ、早く逃げませう。」

妙子はまだ夢現のやうに、弱々しい聲を出しました。

「計略は駄目だったわ。つい私が眠ってしまったものだから、——堪忍して頂戴よ。」

「計略が露顯したのは、あなたのせむちやありませんよ。あなたは私と約束した通り、アグニの神の憑

つた真似をやり了せたぢやありませんか？——そんなことはどうでも好いことです。さあ、早く御逃げなさい。」

遠藤はもどかしさうに、椅子から妙子を抱き起しました。

「あら、嘘。私は眠ってしまったのですもの。どんなことを言つたか、知りはしないわ。」

妙子は遠藤の胸に凭れながら、咳くやうにかう言ひました。

「計略は駄目だったわ。とても私は逃げられなくてよ。」

「そんなことがあるのですか。私と一しよにいらつしやい。今度しくじつたら大變です。」

「だつてお婆さんがゐるでせう？」

「お婆さん？」

遠藤はもう一度、部屋の中を見廻しました。机の上にはさつきの通り、魔法の書物が開いてある、——

「お婆さんはどうして？」

「死んでゐます。」

妙子は遠藤を見上げながら、美しい眉をひそめました。

「私、ちつとも知らなかつたわ。」

お婆さんは遠藤さんが——あなたが殺してしまつたの？」

遠藤は婆さんの屍骸から、妙子の顔へ眼をやりました。

今夜の計略が失敗したことが——その爲に婆さんも死んでしまへ

ば、妙子も無事に取り返せたことが、運命の力の不思議なことが、や

つと遠藤にもわかつたのは、この瞬間だつたのです。

「私が殺したのぢやありません。あの婆さんを殺したのは、今夜こゝへ来たアグニの神です。」(をばり)



イフを突き立てた儘、血だまりの中に死んでゐました。